

役場の対人援助論

(3 7)

岡崎 正明

(広島市)

支援する側とされる側のあいだ

だからというんじゃないけれど・・・

採用面接で聞かれる定番といえば志望動機。

「どうして公務員に？」

「なぜ福祉職を目指したのですか？」

もちろん受ける側もその辺は心得ているので準備している。

ただ、もちろん嘘をつくわけではないだろうが、そこで答える建前的なことがすべてじゃなかったりするものだろう。

年齢を重ねて後輩や部下のような人と仕事をするが増えたが、私はつい「どうして福祉の仕事をしよと？」と聞いてしまうタチだ。そんなことを聞かれたら私自身も正面切って堂々と答えにくかったりするくせに、である（迷惑！）。

別に素晴らしい動機や高尚な話を聞きたいわけではなく、相手がどんな思いで、どういう姿勢でこの仕事に向き合うつもりなのか。何に興味があり、どこを目指しているのかを単純に知りたいだけなのだが。だから別に「人と話すの好きだし、市役所なら転勤ないと思って…」「民間にいたけどやはり安定したところがいいかと…」でも全然納得。「なるほど。たしかにそうだよな」となる。

大抵の人は「そうですねえ…」と、戸惑いや迷いを含みつつ話してくれるが、たまに「人助けがしくて！ボランティア活動が好きだったんです！！」と真っすぐな目で話してくれる人には、ちょっと気後れして目を逸らしてしまう（私なんか当時交際してた彼女のマネしてこの世界に入りました。ごめんなさい）。

「なぜ福祉を？対人援助を？」

自問自答すると、紆余曲折、いきおいや巡り合わせ、打算的なものから信念や興味、自分なりの理想的なものまで、かなりの振れ幅でいろんな要素が出てくる。

だからひと言で「私はコレで！福祉を目指しました！」（禁煙グッズのCMがよぎった人は昭和確定）などと言いつけるのは簡単ではない。きっと誰もが多かれ少なかれ、そんな感じではなからうか。

ただそうはいっても、決定的なファクターというものはそれぞれに存在するだろう。

私で言えば、生まれつき身体に障がいがあり、支援される側として生きてきた部分があるという部分が、今の職業選択に大きな影響を与えていることは間違いない。

若いときにはその反動で一定の距離を置いていた頃もあった。しかし就職活動に挫折し、大学での勉強もまったくしておらず（お父さんお母さんごめんなさい）、一般企業で夢や利潤を追求するということにもなぜだかピンとこなかった私が、改めて己が社会で生きていく上でのやりがいとか意味とかを考えたとき、結局残っていたのは最大のコンプレックスであった「障がい者という立場で生きてきたこと、見てきた視点」だった（もちろん彼女の影響もありましたけど（笑））。

それから数年して児童相談所勤務となったとき、母から「あなたが3歳頃、その療育施設に通っていたのよ。覚えてない？」と言われ、なんだか不思議な感覚になった。そういえばどことなく懐かしいような、古臭いけど落ち着くような…。それが気のせいなのか、それとも遠い記憶の断片なのかは、今も分からない。

およそ20年前、この建物の肢体不自由児通所施設に通う男児が、いずれここで曲がりなりにも支援者として働くことになるなんてー。当時の誰が予想できただろう。

そんな風に考えると、家族療法や家族支援がライフワークのようになったのも、無意識だったが私の原家族がステップファミリーであることと、どこかでつながっているのかもしれない。

かいつまんで書くと私の父は再婚で、幼い連れ子2人がいた（私の兄と姉）。母は初婚だったから、当時母の両親からかなり反対されたい。しかしそれを振り切って父母は結婚し、母はいきなり2児の母親となった。そして夫婦で借金して小さな飲食店をはじめ、数年後に生まれたのが障害のある末っ子の私。んー、なかなかハイリスク（笑）

そんな我が家だが、私はそのことを20歳くらいまでほとんど意識することなく育った。まあ私にとってはみんな血縁者だし、一番幼くて事情に疎かったのもあるのかもしれないが、うちはいたってフツーの家庭だった（と思う）。

年の離れた末っ子の私は、兄姉の奪い合いになるほど可愛がられた（数年限定）し、物心ついてからは喧嘩もよくした（とくに姉とはプリンの取り合いなど、食べ物なこと）。クリスマスやお正月、運動会などにまつわる家族の思い出も、ソコソコ持ち合わせている。裕福ではなかったが、貧乏というほどでもない、いわゆる日本の中間層というヤツだ。家族に愛され、順調にぬくぬくと育ったように思う。

もちろんそんなフツーの生活が成り立つためには、父母の目に見えない努力や苦労がたくさんあったであろうということは、今なら少しは想像できるが。

そんな背景が関係しているのか、してないのか不明だが、私はケースでステップファミリーに関わるとき、リスクばかりでなく強みやマシについて、世の中にあるステレオタイプからわりと自由になって見つけられる気がしている。合っているかどうかはともかく、身近な経験を重ねてリアルにイメージできるのかもしれない。

進化論じゃないけれど

以前職場に実習生が来た際、その子がちょっとしたパニック発作のようになったことがあった。聞けば不登校や鬱の経験がある子で、自らの経験がきっかけで支援職を目指したとのことだった。現場にいとそういう事例に時々出会うが、支援者の中にはそうした動機での職業選択に懐疑的な見方をする人も一定数いたりする。

確かに自分の中の課題があまりにも未処理なままで支援職を目指すことは、ときに治りきっていないカサブタを剥がしてしまうような経験になる。そこに向き合い、継続的に関わるには、それなりの覚悟や準備も必要だろう。

だが完璧に治りきっていない状態でないとダメというのも、それはそれで厳しすぎるというか、生き物を知らない考えのように思えてしまう。

最近仕事で、こどもびあの方々と関わりを持たせてもらった。こどもびあとは、精神障害や疾患を抱えた親に養育された経験を持つ、子どもの立場のピアグループである。東京や大阪、福岡や沖縄などにグループが作られ、徐々に広がりを見せている活動だ。

今注目されているヤングケアラーだったり、虐待環境のサバイバーだったりする方々であり、複雑で厳しい環境の中で生き抜いた彼ら・彼女らの語りは、とても重みがあるとともに、人のレジリエンスやエンパワメントの可能性を感じさせてくれる。

対人援助に関わる者、特に子どもやその家族の支援に関わる人には、ぜひ一度耳を傾けてもらいたい語りである。その話には、普段私たちが関わっている子どもや親らの、言葉にできずにいる想いが表現されているように感じられてならない。

そのこどもびあの方々の中には、看護師やソーシャルワーカー・介護職など、支援に携わる方が結構な割合でいたりする。職業選択の動機を聞くと「親の病気を理解したかったから」「医療や福祉が生活の身近にあって」といった答えが返ってきた。

2世タレントや世襲政治家が時に批判的に語られるが、ある意味それは自然なことなのかもしれないあと、このとき思った。

動物が環境に適応していく進化論じゃないが、我々人間も生き物として環境の影響を受けずには生きられないわけで。だから支援の受け手やその周辺にいる者が、支援に関わる存在になるというのは、考えてみれば自然な流れと言えるのだろう。

そう考えると、支援する側とされる側の境界線は、けして動かせない山のようなものではなく、案外流動的で暫定的なものに過ぎないのかもしれない、と思った。

まるで体育の時間にグラウンドに引かれた石灰の白線のように、「とりあえず今はココからココまでー」くらいのもので、私たちも今はたまたまこちら側にいるが、いつ白線の反対側にいくかも知れない。そんな存在なのではないだろうか。

流行りだからじゃないけれど

個人的にここ最近興味を持っている「支援者当事者研究」と「オープンダイアログ」。
この2つも、ここまでの話にリンクする気がしてて。

支援者当事者研究は、北海道浦河のべてるの家の実践から生まれた当事者研究を、支援者自らも行ってみたいという試み。

精神障がい者が、おのれの病気や生きづらさを専門家に診断されたり、命名されたりするのでなく、仲間とともに自ら研究し、そのメカニズムを究明して「自分で自分を助ける」方法を創造していくという当事者研究。いわば「自分で行う自分のトリセツづくり」であり、自分でやるだけにその納得感がスゴイ！

また、仲間の応援を受けながら、自分が自分の病気研究の主任研究員になるという、超主体的かつ客観性を伴う取り組みは、これまでの「治療や支援は専門家や支援者にしてもらうもの」という概念を吹き飛ばす、画期的な手法だ。

それを支援者もマネしてやってみよう？

もはや支援の主客とか考えることが意味を持たないような。なんだかカオスな香りが漂うところが魅力的である。

この活動は少しずつだが、全国各地の支援者の中で広がりを見せている。そのことは、支援者も「応援」や「正しく理解されること」が大切であるという、これまで見落とされてきた、人として当たり前の事実気付かせてくれる証ではないかと思う。

オープンダイアログの方は、最近医療や福祉などの分野で大きく注目を浴びているアプローチだ。

この手法でユニークなのは、これまで支援の中で定番とされてきた、助言・指導・説得的なことを回避し、とにかく対話を継続すること。第一人者である斎藤環氏によれば「治そうとしない」ことが大事だとか（笑）ほんとこの人、大人しそうな顔して、サラッとロックなことを言うからカッコいい。

オープンダイアログでは医師や支援者という立場を捨て、一個人というフラットな立場から相手の話に耳を傾け、興味を持って当事者の話を聴いていく。

「僕らはあなたの経験や感覚が分かりません。だから教えて欲しい！」というスタンスで、違いを違いのまま大切にし、大事な話ばかりしようとせず、とにかく自由に語ってもらおう。そしてそのことへのポジティブな感想を「リフレクティング」という、当事者の前で支援者側が話し合う形をとって見てもらう。それまで支援者のふるまいとして禁忌とされてきた個人的な感想や経験談も、どんどん出していいと言う。

これまでの支援でタブーとされていた「常識」に対して、改めて「ほんとにそう？」との根本的な問いかけをするオープンダイアログ。

私たちが培ってきた、専門家としての態度やスタンスが、実は「支援する側」と「支援される側」の分断を生み、固定化した役割を演じることにつながっていやしないか？その結果、当事者の回復や解決が妨げられていないか？そんなメッセージすら感じてワクワクするとともに、やはりあちら側とこちら側に大した差はないんだな〜と。

そんなことを考えていたら、高齢者支援をしていた頃に関わってた精神疾患のおじいさんのことを思い出した。

妄想で「兄貴がヘリコプターから俺を見張っている」と思い込んで、変装して買物に出るような人だったが、とてもやさしい人で、いつも私の体を気遣ってくれた。訪問しようとする「あんたに来てもらうなんて申し訳ない！」と、全力で止めて自分が訪ねてくるし（笑）

結局家賃滞納とかで地域生活が難しくなり、親戚からの相談もあって施設入所をお手伝いしたが、あの人にとって、私は「支援してくれる人」に見えていたかどうか？

まあ物事の解決には、そんなことどちらでもいいのかも知れない。